

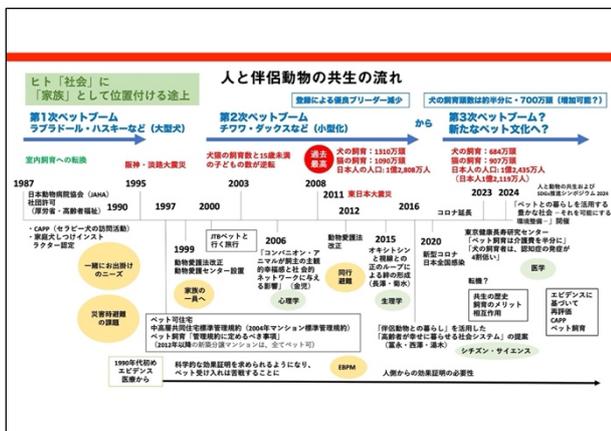
ペットとの暮らしを活用する豊かな社会 — それを可能にする環境整備 —



主催者背景説明

○司会 第2部では、「人とペットが幸せに暮らせる環境整備をどのように行うか?」というテーマで、事例発表をしていただきます。

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会のひとつのモデルとして、「人もペットもずっと一緒に幸せに暮らせるハートマークの街」を実現する方策を皆さんと考えたいと思います。



先ほどのスライドをご覧ください。

人と犬・猫の共生の歴史の中で今を考える時、ヒトが作った「社会」という場に、彼らを「家族」として位置付けていく途上にあると考えられます。

この第1次ペットブームから、ペットとのライフスタイルは、大きく変化しました。家の中で一緒に過ごし、一緒に車に乗ってお出掛けをし、カフェやお宿でも一緒に過ごすようになります。このペットブームを牽引したのは、当時30代~50代の方々です。この世代は、先程の感謝状贈呈式

でもお話ししたように、しつけやペットのケアにも気を配り、新たなペットとの暮らしを開拓してきた方々とも言えます。

2006年の金見先生の論文の時点では、欧米とは違って、「ペット飼育は、飼い主さんの幸福感にマイナスの影響がある」という結果が出ました。「自分の大切なペットが社会に受け入れられていない」と感じる事が原因でした。2012年には、新築マンションの管理規約は、ペット可となります。

2015年の麻布大学長澤先生・菊水先生のオキシトシン研究、人間の赤ちゃんは、愛着行動に視線を使い、見つめ合うと幸せホルモンのオキシトシンがお母さんと赤ちゃんの双方に作用しますが、飼い主さんとワンちゃんの間も同様で、生理学的には、ワンちゃんは飼い主さんと子どもと同じ絆を持っていることがわかりました。

2016年の私達の論文では、ペット飼育者は、生活に不満を持つ人が少ないという結果も出ており、受け入れ環境や研究が進んだことが、飼い主さんを幸せにしてきた側面もあると思います。

そしてこの世代が、いよいよ高齢者施設に入居する時代がやってきました。これまでは、番犬として外飼いだっただけの方が高齢者施設の利用者の中心でしたが、ここで、ペットに対する高齢者の意識の大きな転換点を迎えることになると思います。抄録にも記載致しましたように、ひとつの大きな課題として、「高齢者とペットの居場所」が浮かび上がってきています。

この涙マークですが、事業者の皆様には、「お客様のニーズ」、そしてハートマークは、「ビジネスチャンス」と言い換えた方がわかりやすかも知れません。

そこで、「人とペットが幸せに暮らせる環境整備」の事例第一弾は、「高齢者とペットの居場所」について

NPO 法人老いの工学研究所 理事長 川口雅裕様と私共、公益社団法人 Knots が発表致します。

川口様には、私が、中楽坊様の事業を知り、大変感銘を受け、是非にとお願いしてお越し頂きました。川口様、有難うございます。

それでは、まず、公益社団法人 Knots 事務局次長 中尾千恵子さん、宜しくお願いします。